

離郷者の心に届くご縁

～ 能登・氷見地域の「こんごう参り」について ～

各地で特徴のある法要・行事が長年にわたって、当地の念仏者の信仰を背景として継承されてきました。しかし、各地に同じ郊外型のお店が進出しているように日本全体が平準化され、更に過疎化が進んで地域の行事の担い手が減少するなどして、特徴ある宗教行事・宗教伝統が喪われつつあります。

その中から、今回は、地域の特徴ある宗教行事として、能登地域に伝わる「こんごう参り」を取材しました。法要参列者から「同窓会の感覚の法要」という声も聞かれた非常に印象的な法要を、皆さまにご紹介いたします。

● 能登氷見の伝統行事こんごう参り

二〇一七年十一月・十二月合併号の『宗報』では、「地域が紡ぐお寺の力」と題し、同年八月に実施した能登地域（石川県北部）の寺院・門信徒を対象とした調査の概要報告（以下、「概要」と表記）を行いました。

その中で、他の地方では見られない独特な伝統的行事が営まれていることについても報告を行いました。その一つが能登地域に伝統的に根付いた行事である「こんごう参り（こんご参り・こんぐえ）」です。この法要は長年、当地で大切に継承されてきたこと、また「離郷門信徒」を対象としたはたらきかけに通じる内容になっていくことを前回報告しました。このたび、法要の実状や意義について、追調査を実施しましたので、あらためてご報告いたします。

能登地域では、二十以上もの法要・法座が開かれているところもあるほど、法要が盛んです。その中には「御崇敬（ごそうきょう・ごそつきょう）」があります。「御崇敬」は講の一つであり、能登や鹿島の三十六ヶ寺が持ち回りで開催する三日八座の大法要です。この講は蓮如上人にまで起源がさかのぼると言われていますが、本願寺第二十代広如上人に本如上人の御影像と御消息を請い、文政二（一八一九）年から再興された能登の

代表的な伝統的法要です。

これに対して、はじまりが不明確で、浄土真宗独自とは言えない行事ですが、能登や富山県氷見^{ひみ}地域に脈々と継承されているのが「こんごう参り（こんご参り・こんぐえ）」です。

●結婚して実家を離れた方向けの法要

こんごう参りはその名称も不明確です。「こんごう」は「魂迎」と表記する例をはじめとして、魂供・金剛・魂合・魂俱・魂具・魂仰・魂講・今遇・婚迎・婚後など漢字の表現だけでも実に多様です（注1）。また「こんごう」や「こんぐ」とかな表記だけの場合もあります。「オヤノマイ（親の参り）」と呼称される場合もあります。地域に根ざし愛着を持たれている行事なのですが、表記さえ統一されていないのです。

由来についても、「他力横超^{おうちよう}の金剛心^{こんごうしん}なり」（『一念多念文意』の「金剛心（信心）」が元だとする説や、中能登地域独

特の歴史や土壌があり、その中で各宗派の寺院が地域独自の習俗を形成していったとみる説、などがあり未だ定説はありません。

当地では、あるお寺の門徒の家庭から他のお寺の門徒の家庭へ結婚していった人を、「孫門徒^{まごもんた}」と呼びます。こんごう参りは、その孫門徒の実家の親が亡くなった後、毎年決まった日に実家のお寺に参詣する法要をいいます。ご案内される対象はお寺によって少しずつ異なるようですが、「孫門徒」を対象としている点が特徴といえそうです。

こんごう参りの中心地帯では、八月一日・七日に集中して行われていることから、盆入りの行事とも言われていますが、八月十五日や七月一・七・十五・三十一日に実施している寺院、六月の田休み期や報恩講・祠堂^{しどう}経^{きやう}・修正会^{しゆしやうえ}の一日に実施している寺院、宗祖の御命日や聖徳太子会と兼ねる寺院もあるようです。また、浄土真宗のお寺だけでなく、曹洞宗^{そうとうしん}や真言宗^{しんごん}のお寺でもお勤めされています。

す。

当地では、「こんごう参り」は参らなければならぬものとされる風習が残っていたようです。「親のこんごうにまいらんものか」といった言葉もあるほか、「コンゴウメシナノカ」といって、法要後のお齋料理^{さいり}を食すれば七日間腹をすかさないでいられるとも言われます。こんごう参りには、孫門徒の他、門徒も参詣するため、お寺によっては最も参詣人の多い法要にもなります。

このようにこんごう参りとは、他家へ結婚していった方々が、お盆を前に実家に帰り、お寺やお墓にお参りし、お寺で食事をとりながら、近況を語り合い懐かしくすごす法要なのです。

●実家の親を失った方の 気持ちに向き合った法要

一昨年（二〇一七年）、私たちは中能登地方のお寺で聞き取りを行いました。その中で本願寺派、大谷派のお寺でうか

がった「こんごう参り」に関する内容を一部紹介します。

A寺：真宗大谷派、名称「魂迎会^{こんごうえ}」。十二月四日に行う。特に案内はなし。ほとんどが在所（地元集落）の方で門徒かどうかは関係ない。

B寺：真宗大谷派、名称「魂迎会」。村では、おひつちや（七昼夜、十一月二十八日までの七日間）期間中の一日を当てている。嫁・婿に行った者（孫門徒・こんごう門徒）が、年に一度実家の寺の法要へ参る。県内、近隣在住の「こんごう門徒」へ「魂迎会」の案内を出す。約二十五名が参ってくる。お齋を出す。

C寺：真宗大谷派、名称「魂迎会」。多い時には百四十名が参拝。精進^{しょうじん}料理を出す。

D寺：浄土真宗本願寺派。八月七日、孫門徒も含め百四十通の案内を出す。

E寺：浄土真宗本願寺派、名称「こんごう参り、金剛会」。他の法座と併

せて行うお齋を出す。

これらは聞き取りの一部ですが、調査地である中能登地域をまとめると、以下のような特徴がありました。

- ・ 時期は、お寺により様々、主に夏だが、年に数回、夏と冬に行われたりもしている。お盆との関連づけはあまり見られない。
- ・ 門徒に限定していない寺院が多い、孫門徒、こんごう門徒とも呼ぶ。
- ・ 規模は、二十〜百五十名。年間行事の中で一、二の参加規模、お齋があり、講で割り当てを決めている寺院も多い。
- ・ どの寺院も重要視し、丁寧に準備している。

実家の親を失った中、懐かしいふるさとで懐かしい人々と共に法要のご縁に遇^あえることは、どれほど力強いことでしょうか。実家の親が亡くなると、ふるさとのご縁が薄くなりがちなものですが、郷愁の思いは、いっそう深く切なるもの

に変わっていくものです。そんな思いを受け止めてくれるのが「こんごう参り」という法要なのです。

農繁期を避けて開催されるようですが、お寺ごとに時期が異なります。また、呼び名や法要の形態も異なりますが、多くの寺で定着しているのは、離郷した方の気持ちに向き合った法要であればこそと思います。

● 同窓会の感覚の法要

昨年（二〇一八年）は実際に七尾市能登^{としま}島町内の真宗大谷派N寺のご協力を得て、こんごう参りにおうかがいし、ご住職、ご門徒の取材も行いました。

同寺では夏と冬、年三回こんごう参りを行われ、このうち地元集落の外の方に案内されるのは七月十一日に決めておられます。前住職より受け継がれた詳細な計画書に基づき、現住職が更に工夫を加えて日程やご案内を協力して作成されました。



七月十一日、法要は午前十一時から始まりました。案内対象は同町内の地元外や七尾市内に在住の門徒出身者です。この日の参拝者は二十名ほどで十八名が女性、二名が男性です。地元集落の講中の女性と坊守・前坊守さんが早くからお齋

の準備をしておられました。

前住職・住職お二人で勤行、『阿弥陀経』と『正信偈和讃・回向』のち

『御文（御文章）』の拝読がありました。

ご法話はご住職が担当され、こんごう参りの名称や金剛の信心、行事の意味などをわかりやすく説明された後、紙芝居でお寺の歴史について楽しく語られました。

その間に庫裏には座がもうけられ、人数分のお膳が準備されます。一時間あまりの法要の後に、ご住職とともに、皆さんがお齋につかれました。

お膳は伝統の黒漆の器に盛られた精進料理、サラダや揚げ物などが別盛りになされているほか、缶ビールも出されています。私たちも一緒にお齋をいただきますが、参拝された皆さんからお話を聞きました。

七尾市内から夫婦でこられた七十八歳の男性の方は、次のように語られました。

「普段の法要は市内のお寺に頼んでい

ますが、こんごう参りは妻と必ず参加します。妻も私もこの在所（地元集落）の出身で、とても懐かしい。小さい頃当たり前にながめていた風景や、遊びの場だったお寺の境内。生まれ育った空気にふれたいし、このお参りはふるさとに行くよい機会です。同窓会の感覚できています」

地元集落近くの六十歳の女性、ご門徒の方で、お寺の法要には必ず参加されます。この方は次のように話されました。

「実家の両親が亡くなり、五十歳くらいからこんごう参りに参加するようになりました。こんごう参りのイメージは、実家の親が亡くなったことを機縁に参加するものです。親が長生きになったのでこんごう参りも高齢化しています。ただ、県外に出た人は参加しなくなりまして。こんごう参りのある地域と違い、この習慣のない地域では結婚先の理解を得ることも難しいようです」

石川県内、車で一時間近くの場所から姉妹でお参りの方は次のように話されま



した。

「在所（地元集落）に家がもうありません。このお寺には先祖のお墓があるため、お墓参りもかねて来ることのできるよい機会になっています。今まで何度も参拝していますが、集落の懐かしい方々ともあえるので、とても有り難い行事です。これからも参拝していきたいと考えています」

● ふるさと法要との共通点

「こんごう参り」で見られるお参りの形態は、近年、宗派が「離郷門信徒」を対象として推奨している法要（離郷門信徒のつどい・ふるさと法要）と共通点があります。「ふるさと法要」は、故郷を離れた方々に集まっていたただく法要です。東京や大阪といった都市部で開催さ

れる点で、故郷へ帰ってくる「こんごう参り」とは異なっていますが、懐かしい方々が集まって勤修ごんしゅうされる法要である点は共通しています。

「こんごう参り」は、ふるさとの寺院を通してご縁が結び直される機会になっています。しかも、地域全体の習俗となることで、お寺が互いの垣根を超え、他の宗派に所属される檀家さんもふるさとのお寺の法座のご縁に接することができるといふ、門信徒の思いに向き合い工夫されてきた伝統行事でもあります。

生まれ育った地域、ふるさとの家族・親戚との繋がり。そうしたご縁が、法要を長年にわたって継続させ、また人々の心の支えとなっています。この点は、「ふるさと法要」について、とても参考になる事例だと感じられます。

● 人々の心に届く法要の工夫を ——こんごう参りに学ぶ——

ご住職は、「案内や準備などとても大

変ですが、意義深い法要であり、これからも大切に受け継いでいきたい。参加者の高齢化や固定化が進んでおり、今までお参りされなかった方にどう勧めていくかもっとしっかり考えたい」と語られました。法要にもっと多くの方々に参加していただきたい、そのために自分たちがもっと変わらなければいけないという思いがあったから、私たちの取材を受け入れてくださったとも打ち明けてくださいました。

法要後、帰り際に「じゃあまた来年〜！」と声を掛け合ってお寺を後にされていく参拝者のお姿が、特に印象的でした。こういう法要は、なかなか無いだろうと思われました。参拝された方々にとって、必要とされる法要、大切にされている法要であり、法要が皆さまの力になっていると強く感じられました。

こんごう参りには、人々の思いに向き合うことから、法要が皆さまの心に届き、力を与え、お寺の活性化にも繋がっ

ている、そのようなすぐれた特徴が見えました。

このような法要の工夫は、現代の伝道に必要なものではないでしょうか。ご法座に参加いただく門信徒への向き合い方の一例として、今こそしっかり学びたい伝統行事であると思います。

〔寺院活動支援部〈過疎地域対策担当〉
浄土真宗本願寺派総合研究所研究員 坂原英見〕

〈参考文献〉

- ※西山郷史「真宗と民間信仰の研究―能登のコンゴウ参り習俗を通して―」『日本民俗学』一六七号、昭和六十一年九月
- ※『ひろがるお寺―寺院の活性化に向けて―』浄土真宗本願寺派総合研究所編、寺院活動支援部〈過疎地域対策担当〉発行、二〇一三年

〔注1〕「魂」の付く語はいずれも後世のあて字とする見解もある。(西山、六頁)
〔注2〕法要の名称は取材に基づいて記した。

地域の特徴的な行事の事例を、寺院活動支援部〈過疎地域対策担当〉・浄土真宗本願寺派総合研究所では収集しております。そのような事例がございましたら、お知らせくださいますようお願いいたします。